

第34回

第4章 国際社会に生きる日本人としての自覚

日本の創造的な思想

今回学ぶこと

近代の日本人は、ひたすら西洋の思想を一方向的に学んでいたばかりではなかった。西洋の影響を受けながらも、伝統思想を踏まえて、みずから独自の思想を打ち立てた思想家も少なくなかった。そのなかで、西田幾多郎の哲学、和辻哲郎の倫理学、柳田国男の民俗学について学ぶ。



講師

田中久文

■ 西田幾多郎の哲学 ■

西田幾多郎は、西洋から哲学というものを学びながらも、そこに独自の思索を織り込もうとした。

その最初の著作『善の研究』は「明治以後、日本人が書いた最初の、また唯一の哲学書」とであるとされた。西洋の近代哲学では、「主観」(心)と「客観」(物)とを対立的にとらえる。それに対して西田は、「主観」と「客観」とに分かれる前の最も直接的な経験としての「純粹経験」というものに注目している。私たちが美しい音楽に聴きほれているとき、私と音楽とは一体となっている。それが「純粹経験」である。そこから、西田は独自の哲学を打ち立てた。

さらに、昭和に入ると、西田は仏教や老荘思想などにみられる東洋の「無」の思想を受けつぎ、「無の場所」の哲学を説くようになる。西田によれば、私たちとそれを取り巻く世界とは決して対立しているものではなく、ともに「無の場所」というものに包まれているという。それは、限定できない無限に広いものなので、「無」といわれるのである。

■ 和辻哲郎の倫理学 ■

和辻哲郎は、日本人の伝統的な生き方に根ざした独自の倫理学を打ち立てた。和辻によれば、西洋の近代的な考え方の基本には、孤立した自己の立場から世界を考えていこうとする個人主義がある。しかし、人間は生まれたときから、他人と切っても切れない

「間柄」のなかを生きている。親子や兄弟や友人関係という「間柄」のなかで、それぞれの役割を引き受けて生きているのが人間なのだということである。そして、そうした「間柄」を支えるのは「信頼」であるとした。こうした、和辻の「信頼」に基づく倫理学は、「和」を重んじる日本人の伝統的な倫理観を哲学的にとらえ直したものだといえよう。

■ ■ 柳田国男と民俗学 ■ ■

柳田国男は、「家」や「村」など古くからある共同体における、日本人の伝統的な生き方を明らかにしようとした。その際、柳田は文字によって残された資料ではなく、彼が「常民」とよぶ一般の庶民によって受け継がれてきた民間伝承を手がかりとした。

「民俗学」とは、文献以外の伝承を手がかりにして、伝統的な生活文化を研究する学問のことであるが、柳田は日本におけるそうした「民俗学」の創始者であった。

『遠野物語』にみられるように、当初柳田は「山人」とよばれる山中で生活する人々に強い関心をもっていたが、やがて平地に住む稲作農耕民こそが日本文化の中心をなすものだと考えるようになっていった。そして、死んだ祖先たちは「氏神」となって、山の上から里の人々を見守っているという、古くからの信仰に、日本人の宗教の原型をみようとしようようになる。

◇ コラム ◇

西田幾多郎は第四高等中学校というところに在籍していたとき、当時の国家主義的な教育に反抗したため、退学処分になってしまいます。その後、現在の東京大学に学びますが、きちんとした学歴がないために「選科」とよばれる立場に置かれ、正式な「本科生」とは差別されました。西田は当時を振り返り、「人生の落後者」になったような気持だったと述べています。でも、そのことをバネにして西田は日本一の哲学者となったのです。